

# 薬剤感受性が低下したチュウゴクナシキジラミの対策について

○岩本哲弥

山口県農林総合技術センター

チュウゴクナシキジラミは、葉や果実にすす病を発生させ、吸汁により落葉を起こすナシの害虫で、平成 23 年に佐賀県、翌年に山口県で発生が確認されている。本県ではクロチアニジン水溶剤等のネオニコチノイド系殺虫剤やスピネトラム水和剤等のマクロライド系殺虫剤の効果が高いことが判明しており、これらの薬剤を春先の幼虫発生期（4 月下旬～5 月中旬）及び夏期の発生増加初期（6 月下旬～7 月上旬）に散布すると効果的であった。しかし、平成 28 年には現地からクロチアニジン水溶剤の効果が低下しているとの情報があり、平成 30 年に登録剤の多いネオニコチノイド系を主体に薬剤感受性検定を実施した。その結果、ネオニコチノイド系 4 剤（クロチアニジン、ニテンピラム、チアメトキサム、イミダクロプリド）とトルフェンピラドについて、感受性の低下が疑われた。そこで、平成 30 年に山口市阿東町のナシ園で採集し、累代飼育している本虫の成虫または幼虫を供試し、対策のための 2 つの試験を実施した。

ひとつは機能性展着剤の加用についての検討で、ニテンピラム水溶剤（1,000 倍）にソルビタン脂肪酸エステル・ポリオキシエチレン樹脂酸エステル（商品名スカッシュ）を 1,000 倍加用した場合の効果について検討した。この希釈液にナシ葉を 30 秒間浸漬後乾燥させ、供試虫（2～3 齢幼虫）を 5 頭放飼した後、マンジャーセルで固定し、25℃・16L8D の恒温器内に静置した。その結果、無加用区では全供試虫が死亡するのに 7 日を要したが、加用区では 3 日で全供試虫が死亡し、効果の向上が見られた。

もうひとつは調合油乳剤（商品名サフオイル乳剤）の産卵抑制効果と殺卵効果の確認である。ナシ葉をサフオイル乳剤の希釈液（500 倍、1,000 倍）に 15 秒間浸漬後、乾燥させた後水挿しにして成虫 20 頭とともに飼育ケースに入れ、産卵数の推移を無処理と比較した。無処理では 5 日後に 100 以上の卵が見られたのに対し、サフオイル処理では濃度に関わらず卵が見られず、産卵抑制効果が示唆された。また、産卵済みのナシ葉を 500 倍液に 15 秒浸漬後 25℃の室内に静置し、無処理と比較した。10 日後の孵化率は、無処理 31.0%に対し、処理 0%で殺卵効果も示唆された。

今後、サフオイル処理についてはより低濃度での効果の確認を行うとともに、他の有望薬剤についても同様の試験を行う予定である。

Countermeasures for Chinese pear psyllid with low efficacy of pesticides

Tetsuhiro Iwamoto

Yamaguchi Prefectural Agriculture & Forestry General Technology Center